



TITLE:

暦をかいた三島茶碗の記

AUTHOR(S):

川添, 康次

CITATION:

川添, 康次. 暦をかいた三島茶碗の記. 天界 1943, 23(261): 99-100

ISSUE DATE:

1943-02-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168568>

RIGHT:

曆をかいた三島茶碗の記 Calendar inscribed on a Tea-cup.

川 添 康 次 Y. Kawazoi.

去る十一月19日、私は東京上野の帝室博物館にゆきました。すると、第8部室の陶器室で別圖の様に曆をかいた「三島茶盃」を見ました。『江戸時代、八代焼、菅野義雄藏』と説明文にあります。

茶碗は全體黒色で、白い字でかいてあります。直径は約10糎です。縁には金色の斑があります。下は文字の詳細です。陳列棚の中に入つてゐますので、裏の方は、よくわかりませんでした。全體の5分の3位です。下は名箋です。大抵まちがひのないつもりです。

午 _子 ハ	未 _ト 六	寅 _ニ 五	卯 _ウ 三	辰 _カ 小正	巳 _キ 十一	辰 _ト 十	子 _ト 七
初年 社日 八月二十三日	二月初四日 四月五日 六月六日 八月七日 十月九日 十二月十日	日 月 九 三 百 五 十三 日 九 月 一 日 辰 子 三 月 十四日 寅 子 九月十六日 辰 子	九 三 百 五 十三 日 九 月 一 日 辰 子 三 月 十四日 寅 子 九月十六日 辰 子	五月五日 五月六日 五月七日 五月八日 五月九日 五月十日 五月十一日 五月十二日 五月十三日 五月十四日 五月十五日 五月十六日 五月十七日 五月十八日 五月十九日 五月二十日 五月二十一日 五月二十二日 五月二十三日 五月二十四日 五月二十五日 五月二十六日 五月二十七日 五月二十八日 五月二十九日 五月三十日	三月廿一日 四月廿二日 五月廿三日 六月廿四日 七月廿五日 八月廿六日 九月廿七日 十月廿八日 十一月廿九日 十二月三十日	二月十六日 三月十七日 四月十八日 五月十九日 六月二十日 七月二十一日 八月二十二日 九月二十三日 十月二十四日 十一月二十五日 十二月二十六日	二月十一日 三月十二日 四月十三日 五月十四日 六月十五日 七月十六日 八月十七日 九月十八日 十月十九日 十一月二十日 十二月二十一日

圖説天文講座の日本天文學史によりますと、寛保4年は吉宗が神田に天文臺を建設せしめた年ですから、一般にこの頃は天文曆學が盛んだつたものと思はれます。

然し、この茶盃は寛保3年に出来たのだと思ひますが、如何でせう。

私は、今、字苑を引つぱり出して見ておるところですが、その中に思ひがけなくも次の様な語が眼に止りました。



●みしまごよみ〔三島暦〕(名) 應仁・文明の頃、伊豆國三島神社から作り出した假名の細字書の暦、明治以前まで伊豆、相模の二國に限り頒布を許された。

●みしまで〔三島手〕(名) 細かい紋のある高麗焼の陶器。こみみで。

●やつしろやき〔八代焼〕(名) 熊本縣八代郡高田村から産する陶器。青灰色の素地に無色の釉薬を施し、多く白色の象眼がある。高田焼。

「十方く。」は「十方くれ」のことかも知れません。下記の「韻塞」に十方くれの句が載つてゐます。

十 方 くれ

てり 曇る 十方くれの あつ さ 哉 毛 執

以上の私の記事が何か御参考になれば幸ひです。ついでに、明治以前に作られた日、月蝕の俳句を御送りします。

日 蝕

日 蝕 の 日 に 喰 入 る や 栗 の 虫 李 由

月 蝕

練 絹 の 色 も う る む や 月 の 蝕 汶 村

月 蝕 の 露 に あ て ま じ 白 牡 丹 木 導

以上は元禄9年刊行の俳書韻塞(俳諧續七部集中の一書)所載の句ですが、恐らく明治以前の日、月蝕の句はこれ以外にはないものと思はれます。何故かと云ひますと、子規の松羅玉液(明治29年八月24日の頃)に子規自身の日、月蝕の句をあげた後、「因に云ふ古人に月蝕の句は一二首之を見たり。日蝕の句は未だ見しことなし」と云つて居りますから。

註: 寛保4年は學暦1744年で、此の歳には下の如き日月蝕があつたことが オボルツァの書物に載つてゐます(但し、これはグレゴリオ式の太陽暦で、時刻は世界時を用ひてゐます)。

1744年十月6日0時44分 皆既日蝕

(皆既線は北極洋に始まり、ベリリング海を横斷し、北米の加州沖にて終る。日本では、午前中、部分蝕が見えた筈)

1744年四月26日20時29分 部分月蝕 (蝕分7分2厘)

(日本では、27日5時29分に當り、夜明け前の西空にて、帶蝕として見えた筈)

1744年十月21日12時28分 部分月蝕 (蝕分5分7厘)

(日本では、21時28分に當り、日没後の東南の空に見えた筈)

(山 本 生)